

---

平成 28 年

# 7 月の普及活動状況

---

## ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

## 活力ある新産地づくり

### 中濃農林■ゆず 生産部会開催

7月25日、かみのほゆず（株）生産部会議が開催され、今後の生産部活動について協議した。生産部では、9月に現地研修会、10月に荷受け検討会と目揃え会、2月にせん定講習会を開催する計画である。

農業普及課からは今年度、新産地づくり地域活性化推進事業で作成した「かみのほゆず栽培こよみ」を生産部メンバーから地域のゆず生産者へ配布してもらうよう依頼した。その他、ゆずだよりや栽培実証ほ、加工所移転、ゆず祭り等についても情報共有した。

農業普及課では、会社と生産者が一体となった産地づくりに向けて、今後も生産部活動を支援していく。



【生産部会議】

## 多様な担い手づくり

### 岐阜農林■いちご 経営診断ドックを開始

6月28日～7月20日にかけて、JAぎふと農業普及課の担当者で、13名の若手生産者を対象とした経営診断ドックを実施した。

経営診断ドックとは、JAぎふが中心となり、JA全農岐阜のいちご研修所卒業生を中心とした若手生産者21名の経営データを経営診断ソフトに入力し、出荷実績や農業所得などの個別の順位や平均値を算出し、それに基づいた診断結果により経営上の課題などについて、個別に指導を行うものである。

当ドックを受けた生産者からは、「自分の経営がどのくらいの位置なのか、どの経費をかけすぎているのか、客観的な数値で分かりやすかった。」などの意見があり、好評であった。

今後、農業普及課では、関係機関と連携し、若手生産者に対する経営指導を継続するなど経営安定に向けた支援を行う予定である。



【経営診断ドックの様子】

### 揖斐農林■柿 第3回担い手育成塾開催～塾生園地を巡回～

大野町かき振興会は農業普及課及びJAいび川の協力のもと「第3回担い手育成塾」を開催（7月22日、参加者7名）した。平成27年に開催した柿婦農塾履修者や柿づくりに意欲的な若手を対象に開催しており、今回はアドバイザーとして農業経営課果樹担当農業革新支援専門員を迎え、塾生の園地巡回（大野町内6か所）を行った。水田転換園での排水対策や古木の低樹高化、剪定方法等などそれぞれが抱える課題を知ることができ、有意義な巡回となった。また、作業委託希望者が増えている現状を知る機会になり、将来塾生が産地を支える担い手として活躍されることを期待したい。



【園地巡回の様子】

### 下呂農林■農業研修生 目指せ「技農伝承」～集合研修を実施～

下呂市内では、今年から野菜出荷組合が運営する「トマト研修農園 in 下呂」を中心に、担い手リーダーの元で9名が長期研修に取り組んでいる。7月19日には、現地で集合研修を開催した。

JA農業機械担当職員から、防除機械の種類と使用上の注意の説明を聞いた後、実際に操作体験をした。さらに、営農指導員からは主な病害虫の見分け方について学んだ。



【防除機械の安全操作方法を学ぶ】



研修生は普段は手仕事を中心とした研修で、機械に触れる機会が少ない。農業普及課では、こういった普段学べない内容の研修会を企画するとともに、研修生同士の交流の場を増やしていく。

### 飛騨農林■集落営農組織 「農事組合法人 みのりの里中野」が設立

飛騨市古川町中野地区では、効率的な水田農業の実践による農業所得の確保と地区内の水田農業の維持・発展を目的に「農事組合法人 みのりの里中野」が設立されることとなり、7月27日に設立総会が開催された。

中野地区では平成26年11月に地区内の農家を対象に実施したアンケート調査を契機に、集落営農組織の立ち上げに向けた取り組みが始まり、行政やJA、農業普及課がサポートを行い、約2年かけて地域での合意形成と設立準備が進められてきた。

今回の設立総会では地区内の44戸が組合員として法人に参加することとなり、また発起人らの理事就任も満場一致で承認され、地区内の農家が一丸となって来年度から水稻栽培に取り組むことが決定した。

農業普及課では、関係機関と一緒に「農事組合法人 みのりの里中野」の経営安定に向けた活動支援を進める。



【代表発起人による説明】

### 農業経営課■普及職員研修 普及指導員養成研修を実施

普及指導員の育成（資格取得）をめざし、7月6日、13日、22日に研修を実施した。今年度は、多くの受講者が苦手とする長文解答問題の対策を重点に研修を実施することとし、受講者は担当農業革新支援専門員からマンツーマンで担当地域の現状と課題、めざす方向とそれに向けた今後の普及活動、留意点などを整理する指導を受けた。その後、模擬試験を実施し研修の成果を確認した。今後、模擬試験問題を定期的に出題し、求められたことを時間内に記述する訓練を支援していくこととしている。また、昨年度の試験合格者から試験勉強方法などを学び、気持ちを新たにしようだった。



【合格体験記を聞く受講者】

## 売れるブランドづくり

### 西濃農林■水稻 斑点米カメムシおよびジャンボタニシ対策

「あきたこまち」「ひとめぼれ」等の早生品種がやや早めの出穂期を迎えているが、7月14日に病害虫防除所から斑点米カメムシの発生予察注意報が出されたため、農業普及課では各品種に対して出穂期に合わせた出穂期前後の除草や薬剤散布について関係機関等を通じて注意喚起を行っている。

また、「ハツシモ」では、暖冬の影響から大垣市、安八郡各町、養老町を中心に田植え直後にジャンボタニシの被害が昨年より大幅に拡大し、補植や植え直しを余儀なくされたほ場が多く出た。農業普及課では防除対策を示したパンフを季節別に3種類作成し、「夏～秋」バージョンを配布して注意喚起を行った。なお、「秋～冬」「春」バージョンは時期に合わせて後日配布する。

#### ※ジャンボタニシの防除対策※

**夏、秋の対策**

今年度はジャンボタニシ（スナグミドリゾゴイ）の発生が多く、田植え後の取り除きが必要となりました。稲後の除草等で発生した雑草が多かった場合は、田と発生原因を調査し、今年（夏）の発生を抑え、ジャンボタニシの数を減らしましょう。

**継続的防除**

- 発生、発生を抑制し、発生を、継続した農作業時に発生させます。継続する場合は必ずしも発生させます。
- 発生中は呼吸できずに死亡するため、田中や水田で発生した雑草を除去し、発生を抑制させます。
- 発生した雑草は発生原因となり、発生を抑制させます。
- 発生した雑草は発生原因となり、発生を抑制させます。
- 発生した雑草は発生原因となり、発生を抑制させます。

**ジャンボタニシについて**

発生原因はジャンボタニシ（スナグミドリゾゴイ）の発生です。発生原因はジャンボタニシ（スナグミドリゾゴイ）の発生です。発生原因はジャンボタニシ（スナグミドリゾゴイ）の発生です。

### 可茂農林■水稻 ハツシモの食味向上対策試験

可茂地域における適正な施肥量を検討するため、岐阜県農業技術センターの協力を得て、窒素施肥量を段階的に変えた試験区を設置し、収量や品質への影響の調査を行っている。

調査は、植付けから出穂期まで生育調査と稲体の分析、収量・品質分析などを行い、最適な施肥量を決定していく。



【調査圃場の様子】

## 東濃農林■アスパラガス 勉強会を開催

7月27日、瑞浪市山田町のアスパラガス栽培農家ほ場において、「アスパラガス勉強会」を開催した。

アスパラガスは、鮮度が味に大きく影響することから、地産地消に適した品目である。また、初期投資を低く抑えることができ、栽培も比較的容易であることから、農業普及課では、直売所の品揃えと主力生産者の経営品目の充実を実現できるものとして提案を行っている。

今回は、今年から新たに栽培を始める農家や、これから導入や、面積の拡大を検討している農家らに声をかけ、先進的な取組みをされている農家と直接意見交換を行う機会を設けた。参加者からは、栽培方法や販路についての質問や、将来に対する意欲的な発言があり、個々の今後の取組みに弾みをつけてもらう良い機会となったと感じた。

農業普及課では、アスパラガスのミニ産地づくりをめざし、引き続き活動を行っていく。



【勉強会の様子】

## 住みよい農村づくり

### 恵那農林■あじめコショウ 土地利用型営農組織への新たな品目導入に向けた検討会を開催

地域の水田農業の担い手として「(農)しもの」(中津川市)が4月に設立、同法人では基幹品目である水稲と組み合わせる新たな品目の導入を検討する中、名古屋市の外食業者と連携した料理用食材として、地域の特産野菜「あじめコショウ」の試験栽培に取り組んでいる。

試験栽培の中間検討会が7月14日に開催され、法人の役員、JA、中津川市、農業普及課により、現地検討並びに室内検討が行われた。

現地検討において栽培管理状況と生育経過の確認、今後の課題とその対策について検討した後、室内検討では出荷調製方法、関係機関の支援分担を再確認し、実需者も招いた今後の現地検討の実施についても検討した。

農業普及課では、同法人の農産物収入の確保を通じた経営安定に向けて、水稲と組み合わせる新品目の導入や実需者との契約生産の実現等、現地での課題解決への支援活動を継続する。



【現地検討の様子】

### 郡上農林■えごま 機械移植研修会を開催

明宝エゴマ生産組合では7月8日に明宝畑佐地区でえごま苗の機械移植研修会を行った。

えごま栽培では、作業の省力化が課題となっており、昨年産では汎用コンバインによる機械収穫を検討し導入される事になったが、今年度は移植作業の機械化を試みた。当日は中山間農業研究所の支援を受けながら、実証ほ場にて全自動汎用移植機を使い、セル苗の移植作業を行った。今回の研修会では機械移植時の省力化は確認できたが、欠株をなくし定植後の生育を安定させるための良質な苗づくりが新たな課題となった。

また、今回は明宝エゴマ生産組合員の他、八幡町・白鳥町・大和町のえごま新規生産者も出席して活発な情報交換が行われ、生産者の交流にも有意義であった。今後、農業普及課では管内で生産拡大が期待されるえごまについて課題解決のための栽培支援等を継続し、特産化を進めてゆく。



【移植研修会の様子】